

入学試験問題

国語

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

〔I〕

誰もが自分が死ぬことはわかっている。しかし、自死を別にすれば、いつどのように死ぬのかはわからない。そこに何ともいえないやな感じがでてくる。たとえ死そのものについての覚悟を決めたとしても、それが、どのようにやってくるのかわからないからだ。だから、人は、日常のなかでは、できるだけ死を頭から遠ざけるのも当然であろう。

ところが、こちらは決して歓迎していないのに、死が向こうから近づいてくる時がある。大病にかかったり巨大災害にソウグウしたりすることもあるが、今回の新型コロナウイルスの大流行もそうだ。

(中略)

今回のコロナの怖さは、その病状がわかりにくい点にあった。朝には元気だった人が夜には急に重篤になる。肺炎のみならず、全身の臓器に症状が表れる。血管の中で血栓を作る。しかもそれを引き起こすのが「サイトカインストーム」と呼ばれるカジョウ免疫だそう。まさに「未知とのソウグウ」なのである。しかも、「濃厚接触」には身に覚えがない、という人でも感染している。

こうなると、誰もが感染の危機にさらされており、感染すれば命にかかわることもある。いくら確率0・02%といっても、一人一人の実存の感覚からすれば、「かかる」か「かからない」か、「生きる」か「死ぬ」かのどちらかなのである。しかも、コロナはどこに潜んでいるかわからない。見えない敵によっていつ死に直面するかわからない、という不安にわれわれは襲われたのだ。

本当のことをいえば、われわれは常に、「生」か「死」かというA状況にさらされている。明日には巨大地震が襲うかもしれない。交通事故にあうかもしれない。いつ心臓発作にみまわれるかもしれない。「ダモクレスの剣」のように、いつ頭上から剣が落ちてきて命を落とすかもしれないのだ。しかし、誰もそんなことは意識していないし、いちいち気にしていれば生活も成り立たない。

かといって、次の瞬間に命果てればそれもよし、というカクゴを決めているわけでもない。何となく意識から遠ざけているだけなのである。そうした日常に、今回のコロナは死の剣を突き付けた。少し感染者数が増加すれば、イシユクしたかのように自粛に入り、解除されれば一気に外へ飛び出す。自粛のなか、命がけでパチンコ屋に出向いた面々にも、確たる死生観があったとも思えない。

いかなる対策をどのように打とうと、感染症は必ず人に襲いかかる。その時、人はどうしても不条理な死に直面せざるを得ない。われわれは、この不条理な死を納得できなくとも、それを受け止めるほかない。その時、われわれは何らかの死生観を求めているのではなからうか。

〔II〕

ところで、今年の京都の祇園祭のハイライトである山鉾巡行が中止となった。たいへんに甲なことである。なぜなら、もともと祇園祭は863年に神泉苑で行われた御霊会に起源をもち、それは、都で流行した疫病対策だったからである。疫病は思いを残して死んだ人の怨霊が引き起こすものと考えられており、この年の疫病も牛頭天王(スサノオノミコト)の祟りだとされたのである。しかも、次の年には富士山が噴火し、869年には貞観大地震が起きる。災害続きであった。ここに祇園祭が誕生する。それはもともと悪霊の鎮魂の祭だったのである。

昔の日本人にとっては、疫病にせよ災害にせよ悪霊の祟りであった。その時、人は神を祀り、鎮魂の祭を執り行い、大仏や薬師如来を造り、また弥陀の本願にあずかるべく一心に念仏を唱えた。それでも災害や疫病が無慈悲に人の命を奪う時、人は、この不条理を「世の定め」として受け入れるほかなかった。人知は限られており人力も限界がある。人は自然や天の前に頭を垂れ、神や仏にすがるほかなかった。そしてこの世の不条理な定めを、昔の人は「無常」といった。「ゆく河の流れはたえずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある、人とすみかと、またかくのごとし」(鴨長明「方丈記」)というわけである。

日本にはユダヤ・キリスト教ほど強い教義をもった宗教はない。だが、神と結びついた死後のたましいの観念や、浄

土教のような極楽信仰や、あるいは仏教の生死一如^{しやうじ}といったような死生観は、まだ古人のころをそれなりに捉えていたであろう。それらは、とうてい受け入れがたい不条理な死を受け止め、死という必然の方から逆に生を映しだそうとした。いずれ、生死ともに「無常」という仏教的観念が日本人の精神の底を流れていたことは疑いえない。常に死と隣り合わせの生をおくった武士にとって、「諸行無常」が生死のカクゴの種になったことも事実であろう。死を常に想起することによって、生に対して緊張感に満ちた輝きを与えようとしたのである。西洋では、ペストに襲われた中世人は、常に「メント・モリ（死を想え）」を戒^{おそ}めにしたという。

もちろん、今日のわれわれは、感染症が悪霊の祟りだなどとは思わない。スサノオノミコトの仕業などと新聞に書けばボツにされるだけだ。薬師如来にお参りにいきたくともお寺の門も閉ざされている。地上の現象の説明をB

〔Ⅲ〕

そのかわりに、今日、われわれの生と死に対して責任をもつのは乙^乙なのである。「まつりごと」が「祭事」から「政事」に代わったのだ。17世紀イギリスの哲学者トマス・ホッブズが、その国家論において、国家とは何よりもまず人々の生命の安全を確保するものだ、と定義して以来、近代国家の第一の役割は、国民の生命の安全保障となった。われわれは自らの生と死を、自らの意志で国家に委ねたことになる。こうしてホッブズは世俗世界から丙^丙を追放した。超自然的な存在によるこころの安寧やたましいの安らぎなどというものは無用の長持となった。

かくて、コロナのような感染症のパンデミックにおいては、国家が前面に登場することになる。われわれ自身でさえも、おのれの生死に対する責任の主体ではなくなるのだ。国民の全体が、たとえ0・02%の確率であれ、生命の危険にさらされている場合には、その生死に責任をもつのは政府なのである。それが「国民」との契約であった。ドイツの法学者カール・シュミットのいう例外状態、つまり国民の生命が危険にさらされる事態にあつては、私権を制限し、民主的意思決定を停止できるような強力な権力を、一時的に、政府が持ちうるのである。これが、ホッブズから始まる近代国家の論理である。

そして、いささか興味深いことに、今回、世論もメディアも、政府に対して、はやく「緊急事態宣言」を出すよう要求していたのである。ついでに言えば、普段あれほど「人権」や「私権」を唱える野党さえも、国家権力の発動を訴えていたのである。強権発動をためらっていたのは自民党と政府の方であつた。

これを指して、日本の世論もメディアも野党も、なかなかしつかりと近代国家の論理を理解している、などと言うべきであろうか。私にはそうは思えない。今回の緊急事態宣言は、もちろんC^Cなものであり、しかも私権の法的制限を含まない「自粛要請」であつた。しかし、真に深刻な緊急事態（自然災害、感染症、戦争など）の可能性はないわけではない。その時に、憲法との整合性を一体どうつけるのか、憲法を超える主権の発動を必要とするような緊急事態（例外状況）を憲法にどのように書き込むのか、といったそれこそ緊急を要するテーマに、野党もまたほとんどのメディアもいっさい触れようとはしないからである。

そうだとすれば、政府はもっと強力な権力を発揮してくれ、という世論の要求も、近代国家の論理によるというよりも、ほとんど生命の危険にさらされた経験のない戦後の平和的風潮の中で生じた一種のパニック精神のなすところだったと見当をつけたくなる。いざという時には国が何とかしてくれる、というわけである。国家はわれわれの命を守る義務があり、われわれは国家に命を守ってもらう権利がある、といっているように私は思える。ここには自分の生命はまず自分で守るという自立の基本さえもない。もしこれが国家と国民の間の契約だとすれば、国民は国家に対して何をすべきなのかと同時に問われるべきであろう。

今日、死生観などということは誰もいわない。だが、私には、どこか、古人のあの、人間の死という必然への諦念を含んだ「無常感」がなつかしく感じられる。少なくとも、古人は、その前で人間が頭を垂れなければならぬ、人間を超えた何ものかに対する怖れも畏れももっていた。そこに死生観がでてきたのである。われわれも、こころのどこかに、多少は古人の死生観を受け継ぐ場所をもつておいてもよいのではなからうか。

（佐伯啓思氏の記事による）

注1 確率0・02%……「日本に関する限り、たとえば東京の感染者数は、無症状者も考慮して多く見積もって約6千人としよう。一方、人口は約1400万人。感染確率は0・05%にもならない。（中略）日本全体でみても、感染確率は高く見積もっても0・02%以下である。」と筆者は言う。

2 「ダモクレスの剣」……幸福の絶頂にあるときも、生命を脅かすような危険が迫っていること（ギリシア神話）。

3 祇園祭……素戔鳴尊を祭神とする京都八坂神社の祭礼。古来、町衆が主体となつて行う山鉾巡行で知られ、旧暦6月、現在は7月に催される。

4 牛頭天王……インドの祇園精舎の守護神。猛威ある御霊的神格だったことから素戔鳴尊に習合され、京都祇園

の八坂神社に祀られて除疫神として尊崇される。

5 生死一如……生と死は切り離すことはできない、よって生死は一つであること。

問一 傍線部 a～h の片仮名は漢字に改め、漢字は読み方を平仮名で記せ。

問二 空欄 A、C に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次の 1～5 の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

1 仏教的 2 非理性的 3 実存的 4 超現実的 5 一時的

問三 空欄 甲に入れるのに最も適当な語句を、次の 1～5 の中から一つを選び、番号で答えよ。

1 不審 2 慶祝 3 皮肉 4 愉快 5 軽率

問四 空欄 乙・丙に入れるのに最も適当な語を、次の 1～5 の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えよ。

1 個人 2 宗教 3 家族 4 国家 5 私権

問五 傍線部ア「私には、どこか、古人のあの、人間の死という必然への諦念を含んだ『無常観』がなつかしく感じられる」について、

① なぜ「私には、古人の『無常観』がなつかしく感じられる」のか。筆者が「(政府はもつと強力な権力を発揮してくれ、という)世論の要求」に対して、筆者が最も端的に批判している一文を、〔Ⅲ〕章よりそのまま抜き出して記せ(三十五字以内。句読点を含む)。

② 「人間の死という必然への諦念」とはどういうことか。これを別の言葉で記した個所を、〔Ⅱ〕章よりそのまま抜き出して記せ(十六字以内)。

問六 傍線部イ「古人の死生観」を、「死」と「生」について分かりやすく述べた一文を、〔Ⅱ〕章よりそのまま抜き出し(四十五字以内。句読点含む)、その初めと終わり五文字を記せ(句読点含む)。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

『眩』(新潮社、二〇一六年)という小説で北斎の娘、葛飾応為を描いたからだ。応為は北斎工房の弟子でもあり、時には助手を務めながら数々の作品が生み出される場にいた。むろん、かの「富嶽三十六景」の試し摺りが上がる現場にも応為はいただろうと、私は想像する。北斎や版元の西村屋永寿堂と共に、摺師の手許を固唾を呑んで見守っている。板木の上に置かれた紙の上を馬連が行き交う、ざつ、しゅつという音だけが響く。

家の中が静まり返っているのには理由がある。「富嶽三十六景」の出版は大博打であるからだ。華やかな役者絵や美人画などとは異なつて、風景だけを描いた景色物は世間の人気を得にくく、出しても打ち切りになるのが常だった。たとえ北斎の名があつても、売れるとは限らない。

なにしろ、江戸者はオギヤアと生まれた日から浮世絵や草双紙、読本に囲まれて育っているので、目が肥えている。仕事や金がなくとも馬鹿にされないが、俳諧や小唄、将棋の一つもできないと「野暮だ、あか抜けねえ」と見下げられる世の中だ。

そんな小うるさいシヨミンにウケてこなかった風景画を、コストのかかる大判錦絵で、しかも三十六作品の揃物で出版しようとしているのだから豪儀な話ではないか。これは伊達か、酔狂か。いや、西村屋は文政十二年(一八二九)に起きた大火によって類焼している。「火事と喧嘩は江戸の華」と嘯いてはみても、神田から出た火は日本橋に京橋、芝一帯をも焼き、後に江戸時代を通じても三指に入るほどの大火事とされる。

つまり西村屋は懐に余裕があつて景色物を出すのではなく、進退窮まつているからこそ打って出ようとしている。ほぼヤケクソに近い。

このイチかバチかの大勝負であった「富嶽三十六景」は、見事に当たりを取った。諸方の人気を得て版を重ね、氣をよくした西村屋は「三十六景」に十点を追加して四十六景にしたほどだ。応為もほっと胸を撫で下ろしたことだろう。

北斎にとっても、この仕事は非常に大きな意味を持つことになった。巨大な波を描いた「神奈川沖浪裏」などは、世界で最も偉大な画家の一人へと北斎を押し上げることになる。むろん、数百年後にそんなビッグ・ウェーブが起きようとは当人が知る由もなく、しかもこの画業を成した時、北斎はすでに齡七十を過ぎていた。西村屋のような勝負心はさらさら抱かず、一人、澄んだ境地にあってあの夏富士「凱風快晴」も描いたのだろうかと思いきや、いやいや、あの親父どのに限ってと私は頭を振る。

いかほどキャリアを重ねようが、何せ自ら画狂人と名乗るほどの絵師だ。新しい画法、ジャンルに盛んにイドミ、過去の実績や己の名など一顧だにしない。守りの姿勢を取らない親父どのにとって、この無謀ともいえる「富嶽三十六景」の出版はさぞ腕が鳴り、心躍るものであっただろう。

そんなことを思いながら、岩波文庫の『富嶽三十六景』を開いてみた。

掌の中で一見開きを繰れば、作品の解説がまた一見開き。絵と文章のリズムが心地よく、時々、北斎と応為父娘の暮らしを思い出したりして懐かしむ。また絵を見て、解説を読む。

激しくうねって砕け散る波濤、吹いて何もかもを舞い上がらせてしまう風、桶職人が揮う槍鉋の音。疾走する馬の息遣いも聞こえるし、木場に漂う材木の匂いも感じる。いかに形にしづらいものを写し取ろうとしていたことか。北斎の飽くなき情熱を思い、今さらながら胸が震える。北斎の筆によって、束の間の造化（自然）と江戸の暮らし、人々の心までもが紙の上に永遠に刻まれた。

地図が付いているのも、本書の粋な計らいだ。どんな土地の富士が描かれているのかがよくわかる。そして各作品の解説においても必ず、どこから見た富士なのか丁寧に述べられている。おかげで富士山を巡る旅に出たような気になる。地図を見ながら北斎が見たであろう土地の風や水、人々の賑わいまで味わう。

ところが、その場所からは決して見えないはずの富士もある。編者の日野原健司先生も、北斎にとってはどこから見た景色なのかは重要ではなかっただろうと指摘しつつ、それでも場所の特定についての推量の手はユルめていない。やがて、想像上の景色であるとした考えられないものも出てきた。

主人公はあくまでも、富士の山だ。画面一杯に、はみ出さんばかりに迫ってくる。けれど作品によっては遠景で小さい。男や女が、「ほら、ごらん」と指を差すその果てでやつと気づくほどのアイコンだ。北斎は遠近、大小を取り混ぜて富士を登場させ、時には水面に映る鏡像を違えてまで、観る者に語りかけてくる。

おやおや、これとは、私は身を乗り出した。もう一度、四十六の景色を眺めてみる。なお嬉しくなってきた。制作順や発行順は未だ確定されていないものの、一点一点をカンシヨウするだけでは見えない北斎のたくらみが私の目の前に立ち昇ってくる。

どうだ、面白いか。え、こっちはどうだ。

西洋画を研究し、その手法を採り入れることにもドンヨクであった北斎は、一点透視画法も自己流に案配してしまう絵師だ。正しいかどうかよりも、絵として「それが面白い」にソウサクのエネルギーが向くのである。どうやら「富嶽三十六景」は、現代の我々が考える A な風景画とは全く別物だと捉えた方がよさそうだ。

これは活き活きと自由に虚構を用いた、壮大な物語なのではないか。

（朝井まかて氏の文章による）

注 一点透視画法……一点を視点とし、物体を遠近法によってわれわれの目に映ると同様の状態に描く画法。パースペクティブ。

問一 傍線部 a～n の片仮名は漢字に改め、漢字は読み方を平仮名で記せ。

問二 二重傍線部ア「進退窮まる」、イ「一顧だにしない」、ウ「腕が鳴る」とはそれぞれどういう意味か、二十字以内で説明せよ（句読点を含む）。

問三 空欄 A に入れるのに最も適当な語を、次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| 1 | 空想的 | 2 | 装飾的 | 3 | 抽象的 | 4 | 漫画的 | 5 | 写實的 |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|

問四 波線部「北斎のたくらみ」を、総括して端的に述べた個所を、本文中（波線部以前）よりそのまま抜き出し（五

十字以内。句読点を含む)、その初めと終わりの五文字で記せ(句読点を含む)。

正解

問一	a 遭遇	b 過剰	c ひそ(んで)	d 覚悟	2点×8＝16点		
問二	A 3	B 2	C 5	e 萎縮(委縮) f じしゅく g おんりよう h いまし(め)	3点×3＝9点		
問三	甲 3				4点		
問四	乙 4	丙 2			5点×2＝10点		
問五	ア ①	ここには自分の生命はまず自分で守るという自立の基本さえもない。(31字)。			6点		
	②	とうてい受け入れがたい不条理な死			5点		
	* この不条理を「世の定め」 可						
	この世の不条理な定め						
問六	イ	初め、死を常に想 終わりのである。			10点		
二問一	a かつしかほくさい	b ふがくさんじゅうろっけい	c よみほん				
	d はいかい	e 庶民	f ふところ	g 挑(み)	h むぼう		
	i あ(く)	j いき	k 緩(めて)	l 鑑賞	m 食欲	n 創作	1点×14＝14点
問二	ア どうすることもできない窮地に陥ること。						
	イ ちよつと振り返ってみることさえしないこと。						
	ウ 腕前をあらわそうとしてむずむずすること。						
問三	A 5					3点×3＝9点	7点
問四	初め、北斎の筆に 終わり、刻まれた。						10点